西域沙門の河南路の利用について

桐　谷　征　一

一　河西路に比較して、史乘に確認できる河南路通行の事蹟は極めて少ない。佛僧の場合においても同様であり、現在次の六件三十五名を認め得るに過ぎない。

○Buddha bhadra（佛馱跋陀羅）　天山南路—河南路—交趾—長安（西暦四〇一～四一二頃着）

○曇無竭・他同侶二十五人　建業（西暦四二〇發）—河南路—居延海—西域北道

○Dharma mitra（曇摩密多）西域北道—河南路—蜀（西暦四二四着）

○法獻　金陵（西暦四七五發）—河南路—居延海—西域北道

○惠生・宋雲　洛陽（西暦五一八發）—河南路—西域南道

○Jñāna gupta（闍那崛多）・Jina yaśas（嗜那耶舎）・Jñāna bhadra（闍若那跋達囉）・Yaśo gupta（耶舎崛多）　西域南道—河南路—鄯州（西暦五三五着）

以上を掲げるについても議論はあろうが、中國から中央アジア・西域諸國へと通行した惠生・宋雲・法獻・曇無竭等の經路には、すでに諸先學の指摘されるところがある。小稿においては、中央アジア・西域諸國から中國へと赴いた他の三件、いわゆる西域沙門の事蹟を指摘し、その意義について考察したい。

二　Buddha bhadra は、北インドから中國僧智嚴と共に東行しているが、その行程を出三藏記集一四・佛馱跋陀羅傳（T. 55. 103 c. L6～9）、梁高僧傳二・佛馱跋陀羅傳（T. 50. 334 c. L22～335a. L4）によれば、彼らは Himaraya, Pamir の交錯する山岳地帶を經て、Tarim 盆地の砂漠を通り、南下して交趾（現在の北ベトナム・ハノイ）に出、次いで海路を北上して青州東萊郡（現在の山東省掖縣）に到達している。兩傳には、その地において有名な Kumāra jīva（鳩摩羅什）の噂を聞き直ちに長安へ赴いた由が讀み取れるが、Tarim 盆地から長安へ至る經過に、かかる迂廻を必要とした事情は注目に價する。又、Tarim 盆地から交趾への經路が河西に據つたものではなく、いわゆる河南路を通行したものであることも推測されてよい。ところが、同事蹟を傳える梁高僧傳三・智嚴傳（T. 50. 339 b. L9～10）には、その行程中に「達自關中」とあり、「關中」はいわゆる渭水盆地に相當するから、これは河西路の通行を示すものに他ならない。この相違は明らかに梁高僧傳の撰者慧皎の傳聞の混亂とみることができよう。何故なら、Buddha bhadra は青州に至つて始めて Kumāra jīva の長安に達した情報を知つた。彼がもし河西路を經て長安に到達したものならば、西暦三八三～四〇一の間、河西に殘された kumāra jīva の消息を途上耳にしなかつたということは考えられない。Tarim 盆地まで確認された彼の足跡が、河西を經ずに、又 Kumāra jīva の噂を聞くことなく交趾まで到達し得る道は、必然河南路を益州へと南下したとみるのが最も妥當であろう。慧皎は、佛馱跋陀羅傳では出三藏記集の記事を轉載していながら、智嚴傳では當時西域交通路の常道として著聞の河西路の通行を示すような結果となつたが、かかる

混亂をもたらした裏には、河西路の利用度が河南路に比して如何に高く、より一般的であつたかという證左を認めることもできる。

Dharma mitra の經路は、梁高僧傳三・曇摩密多傳（T. 50. 342 c. L13～25）、名僧傳抄・曇摩密多傳（卍續 2Z. 7. 1. 10. L 8～11）にみえる。それぞれ記載に一致するところはないが、名僧傳抄にいう「汎泊東來、以宋永初三年、始至江陵」の行程は、梁高僧傳にみる西域諸國—龜茲—敦煌—蜀—建康の經路中、蜀・建康間に配すれば納得できる。蜀はすなわち現在の四川省成都の地方に相當し、吐谷渾と南朝・北朝の交易の據點であつた（松田壽男博士「吐谷渾遣使考」史雜四八・一一ノ四九、一二ノ三七）ことを參照すれば、Dharma mitra が辿つた經路はそのまま西域諸國と南朝との貿易路に一致すると判斷しても武斷ではない。

Jñāna gupta, Jina yaśas, Jñāna bhadra, Yaśo gupta の經路は唐高僧傳二・闍那崛多傳（T. 50. 433 b. L29～433 c. L9）に明確であり特に問題はない。一行は、Gandhāra（揵陀羅）—Kapiśa（迦臂施）— Hindukush（大雪山）— Ephthalites（厭怛）— Tash-kurghan（渴囉槃陀）—Khotan（于闐）—Charklik（鄯善）—吐谷渾—鄯州、と辿つている。鄯州は現在の青海省西寧縣の西・湟水流域に比定される吐谷渾の要地である。一行中、唐高僧傳には Yasó gupta の名はみえないが、彼らが中國へ到達した際の人數について「十人之中、過半亡沒、所餘四人、僅存至此」とあり、內典錄・開元錄によつて補充した。

三　いうまでもなく、中國から中央アジア・西域の諸地方に赴くものは、甘肅省の西部すなわち河西を經由するのを常とする。現在の甘肅省皐蘭縣から武威・張掖・酒泉・敦煌を結ぶ交通路は漢代以後中國・中央アジア間の交通幹線をなしている。それにもかかわらず、何故前記の六件三十五名のみは青海地方の河南路を經過したものであろうか、その意義について次に考察しよう。

湟水流域に勃興して青海地方に據つた吐谷渾が存在したのは、西曆第四世紀前半から七世紀後半に及ぶ約三世紀半であるが、彼らが中國・中央アジア間の交通・貿易線の中繼者乃至案內者として最も得意の期間は、ほぼ五世紀初頭から六世紀半ばに及ぶ一世紀半と限定される（松田博士前揭論文）。前出の事蹟が注目される所以は、その通行の時期がすべて吐谷渾の活動期に合致する點においてであり、從つてその間、商胡や佛僧にして吐谷渾の導譯に賴つて往來したものが少なくなかつたことは容易に推測できよう。彼らが吐谷渾の手引を得たのは、唐初玄奘がインドに赴いた際、Kucha（龜茲）から Kashgar（疏勒）を經る常道を採らず、天山山脈を越えて Suy-âb（碎葉）に達し、西突厥可汗の保護を得て Sogdiana（粟特）に向つたのと同樣に解される。

反面、吐谷渾にも佛敎を受容し、佛僧を誘致せんとする態勢は存在した。吐谷渾王拾寅（西曆四八一沒）の時代に「國中有佛法」「又、表於益州立九層寺、詔許焉」（梁書五四・諸夷傳・河南國條）と傳えられる事情によつてそれを窺い得る。ただその受容の根據をみるとき、益州は Dharma mitra の行程にもみられるように、又河南（吐谷渾）と隣して常に商賈を通じ（梁書）、さらに芮芮が常に河南道に由つて益州に抵つた（南齊書）、と傳えられるよりみて、吐谷渾・芮芮さらに西域諸國などに對する南朝の重要な互市場であつたことは明らかである。こうした益州への吐谷渾寺院の進出には當然商業上の目的も存在したことを察知できよう。